### 埼玉県東南部方言の特徴と本書の概要

本研究は、埼玉県東南部の大宮台地安行支台と東側中川低地地域(川口市東部、草加市、八潮市辺り)に行われていた伝統的方言、とりわけ北足立郡「旧安行村」とその周辺の方言の言語体系を記述対象としている。この地域で行われる言語は大づかみに言えば、戦前(1945年以前)に言語形成期を終えた世代、高度経済成長期以前(1970年頃以前)に言語形成期を終えた世代、高度成長期以後の世代で、体系が大きく変容しているが、戦前期と高度成長期以前の世代の言語を記述対象としている。

本書は、1972年の修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』を原本として、その後の調査と研究をふまえた 1996年の補注版(私家版)の『埼玉県東南部方言の記述的研究』の新たな改訂版であるため、戦前世代を「高年層」、高度成長期以前の世代を「成年層」と指称している。内容に関して、音韻篇は 1970年から 1972年に集中的に調査したものを基にして記述されている。文法 篇はその後の 2000年頃までの調査・研究をふまえて加筆補足されている。

埼玉県東部地域は、「埼玉特殊アクセント」(cf. 金田一春彦『埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察』(1948 謄写印刷))の地域として方言学の分野では知られる地域であるが、体系的で内在的な調査と研究が十分なされているとは言えないように思う。例えば、埼玉県方言では一般に非語頭のガ行鼻音(鼻濁音)が行われないとされているが、東南部地域には広く行われていることが象徴的で、音韻(発音とアクセント)や構文的機能を担う格助詞の実態などは殆ど知られていない。筆者(1947 年埼玉県旧安行村[現草加市]生)は、ことばが同じと感じられている周辺地域も視野に入れて地域言語のその言語としての体系を音韻・文法・語彙にわたって言語学的に明らかにしようと試みた。その一応の報告が本書である。

#### 音韻に関して

音声学的分析は服部四郎『音聲學』(1951 岩波書店)に拠り、国際音声学協会の音声記号に基づいて記述している。埼玉地域の言語音の精密な音声学的分析と記述は本書の大きな特長と言えると思う。例えば、夕行・ダ行・ナ行の頭子音は同器官的と一般に信じられているが、当方言において前二者は歯裏歯茎音

だがナ行頭子音は調音点が少し後ろの歯茎音である者が多くいることが確認できたことなどである。音韻論的分析は服部四郎『言語学の方法』(1960 岩波書店)に拠るが、長母音は後半部を「引音」と解釈し/VV/ではなく/V<sub>R</sub>/とする。下降二重母音は、音韻論的には/V'<sub>I</sub>/(戦後世代/V'<sub>I</sub>/)の音声的な弱まり音と解釈している。

方言の音韻事象の分析において取り上げるべき諸点は次のとおり。

①戦前世代(高年層)は共通語のア行の「い」と「え」に対応する音節が音韻として区別されないだけでなく、共通語のハ行の「ひ」と「へ」に対応する音節も音韻的に対立していない。同様に区別・対立のない他方言の分析ではイ段・工段のいずれか、ふつう工段に合流しているとする解釈が多いが、筆者は、問題の音が方言話者にとってイ段音なのか工段音なのかという明確な覚識がないこと、自身の音声の[イ][エ]/[ヒ][へ]を聞き分けていないことを確認し、方言話者の意識と音声的実態から一定の音韻的条件下で対立が「中和」していると解釈した。

厳密には「ひ」に対応する音節は東京方言で母音が無声化しない位置で「へ」と中和しているのであって、東京方言で母音が無声化する位置の「ひ」に対応する音節は「シ/si/」に合流している。比較方言学的には、共通語のカ行・タ行音の前の「ひ」(/hi/+/k, t, c/)と、促音を挟んでのカ行・タ行・パ行音の前の「ひ」(/hi/+/Q/+/k, t, c, p/)に対応する音節に対して、方言では「シ/si/」が音韻法則的に対応しているのである。従って、歴史的には母音が無声化する音節「ひ」(無声母音)の「シ/si/」への変化が先行し、この変化の完了後に共通語「い」と「え」および「ひ」(有声母音)と「へ」に対応する音節の合流が起こったことが言語学的に推定される。文献資料の欠如にもかかわらず、体系的、比較的研究によって、文献に現れない「母音無声化」の存在や、「い」「え」/「ひ「へ」の合流に至る道筋(音韻史)の一端が明らかになったと考える。

②埼玉特殊アクセントといわれる地域のアクセントの分析に関しては、音声的な観察に留まって音韻論的・体系的水準での分析が十分になされていなかったように思われるが、東京方言とのアクセントの対応もふまえて分析を行った。発話における音声的臨時的変異は大きいが、音韻的弁別的差異という点で、基本的に拍数ごとのアクセント型の種類(n+1)は東京方言と変わりがない。体系としては頭高型を欠き、尾高型にアクセント核が固定的なもの(/~〇)/で表記)と、アクセント核が付属語との結合で単語境界を越えて付属語

の第1拍に移動するもの(/~○=]/で表記「但し付属語「ミタイ・ダ」では 核が動かず、付属語「ノ」では核が消える])の2類型があることが際だった 特徴となっている。3拍語を例にとれば、東京語の頭高型に方言の中高型が、 東京語の中高型に方言の核の位置が固定的な尾高型が、東京語の尾高型に核の 位置が付属語との結合で1拍後退する尾高型が対応している。すなわち、ア クセント核が対応する東京方言のそれと比べて1拍後ろ(促音が続くときは2 拍後ろが多い)にずれる対応を示している。これは、通時的には、東京方言(共 通語)のアクセント核が1拍後退して成立したことを示している。しかし、こ の対応の異例となる語彙群の存在から以下の知見が導かれる。

例外を含むが、3 音節名詞第 5 類「命・姿・火箸・枕・…」と第 7 類「兜・ 椿・便り・病・…」が東京方言はともに頭高型 / lacktriangle l玉県東南部方言は第5類が尾高型/○●● ]/、第7類が中高型/○● ]○/で 区別がある。これは埼玉県東南部方言の祖アクセントが東京語のようなアクセ ント体系ではなく、それとは異なった体系であったことを指示している。東京 方言が埼玉県東南部方言の祖語なのではなく、埼玉東京共通祖語で、第5類 は中高型 /\* ○● ↑○ /、第 7 類は頭高型 /\* ● ↑○○ / の祖形が再建される必要 があるということである。東京方言は第5類が頭高型化して第7類に合流し て成立し、埼玉県東南部方言は祖語からアクセント核が1拍後退することで 成立したと概略言うことができる。このような形でアクセント史が文献資料の 不在にもかかわらず比較方言学的方法で再構される。

#### 文法に関して

単語の認定に関しては服部四郎『言語学の方法』(1960)の「付属語と付属形 式」に拠っている。服部の単語認定に基づいて、形容動詞語幹を自立語「状態 詞 | とし形容動詞語尾を付属語として文法的に整理し、また動詞・形容詞と(単 語未満の)付属形式(学校文法のいわゆる助詞・助動詞)との結合体(服部認定で 1 単語)を記述するに当たって、同一の統語構造を保持するものを単一の活用図 列 paradigma を構成する諸形式とし、(使役動詞・受動動詞などのように)統語 構造が変動するものを「派生形式」とした(この付属形式は派生語幹形成接尾辞 を含む形式で、結合体が全体として別個の活用図列を構成する)。単一の活用図 列を構成する諸形式は、(丁寧形や否定形などの)再活用する「拡張語尾」をも つ諸形式(拡張語尾は拡張語幹形成接尾辞+統語語尾からなる)と、それ以外の 学校文法の(自立的な)活用形も含めての「統語語尾」をもつ諸形式とに形態論 的に分けたうえで、その形式の構文機能や断続機能に基づいて、新たな活用表 paradigma を作成した。この新しい記述方法は伝統文法や学校文法とは異なる一般言語学的な視点からする現代日本語の文法記述の1つの私案をも目指したものである。接辞に「派生」と「屈折」を区別し、「屈折接辞(語尾)」をさらに「拡張接辞(語尾)」と「統語接辞(語尾)」に分けることは名称の如何にかかわらず日本語文法の記述には是非とも必要な(概念分けと)手続きであると考える。

方言の文法事象の分析において取り上げるべき諸点は次のとおり。

①高年層において、格助詞が東京方言に比べて豊富なことと、名詞との結合 に当たって有生性が関与する(方言に特有な)格助詞と、その点で中立的な(東 京方言と共通な)格助詞の2類があることが挙げられる。

東京方言の連用格の格助詞が「が・に・を・へ・と・から・で・より(・まで)」であるのに対して、「を」を除き対応する「ポ・ニ・〇・イ・ト・カラ・デ・ヨリ(・マデ)」の他に、方言に特有な「コト・ガニ・ゲ」が加わる点が大きく異なっている。「ポ・ニ・〇・イ・ト・カラ・デ・ヨリ(・マデ)」は付く名詞の[有生性/無生性]に関して中立的であるが、方言に特有の「コト・ガニ・ゲ」の3助詞は「有生」の生物名詞にしか付かない。

方言に特徴的な3助詞の概略:

②「コト」は東京語の対格(目的格)「を」に対応するが、生物名詞目的語にしか付かない。無生物名詞目的語は無助詞( $\phi$ )で表される。コトには移動の経由格の用法はない。

「家で猫コト飼ってる」

「家で本ゅ読んでる」

(「子どもが橋 $\phi$ 渡ってる」(このように移動の経由格は常に無助詞( $\phi$ )で表される))

東京語の「に」に対応する格助詞が、「ニ・ガニ・ゲ」の3つあって使い分けられている。

⑤「ガニ」は生物名詞にしか付かず、基本的には東京語の「おまえにおれが 分かるものか」、「おれに英語が話せたらなあ」のような「~に~が+所動 詞」の「~に」の位置に現れる。

「おまえガニおれガ分かろんか」「おれガニ英語ガ話せたらなあ」 従って、「太郎には次郎が大人に見えた」は「太郎ガニは次郎ガ大人ニ見 えた」となる。 ②「ゲ」は生物名詞にしか付かず、「動作の向けられる相手(動作の受け手)」 いわゆる「与格」を表す。「動作の向けられる相手(動作の受け手)」が無 生物名詞のときは「イ」か「ニ」が使われる。

「太郎 が花子 ゲ猫コトくれた」(「花子が太郎から猫をもらった」の意味) 「あの犬がおれゲ飛びかかってきた」

「太郎ガ花  $\{ 4/-1 \}$  水  $\phi$   $\{ 4/-1 \}$   $\{ 4/-1 \}$  水  $\phi$   $\{ 4/-1 \}$   $\{$ 

大づかみな傾向として、これら3助詞が健在なのは戦前に言語形成期を終えた世代で、戦後の高度成長期以前に言語形成期を終えた世代では、格助詞「コト」のみ健在で、個人差を伴って、「ゲ」が先に、次いで「ガニ」の順で消失している。高度成長期以後の世代はほぼ共通語化している。

②構文法にかかわる構造格に関して日本語諸方言の中でも注目されるべき諸 現象が観察される。二項(二価)動詞文の格表示は、通言語的に大きく2類型 がある。それは、二項動詞文「S(主語) + O(目的語) + Vt」の他動詞主語 Svt が一項動詞文「S + Vi」の自動詞主語 Svi と同じ格表示を持ち、他動詞目的語 Ovt が特別な格表示「対格 accusative」を持つ「対格型」言語と、二項動詞文「S(主語) + O(目的語) + Vt」の他動詞目的語 Ovt が一項動詞文「S + V」の自動詞主語 Svi と同じ格表示を持ち、他動詞主語 Svt が特別な格表示「能格 ergative」を持つ「能格型」言語の2類型である。この2類型は動詞の性質によっては1言語で併存することがあり、それが「分裂能格型」言語である。



埼玉県東南部方言の二項動詞文の格表示は次のようになっている。

- @自動詞文(一項能動詞)「猫ガ+走ってる」
- ⑤他動詞文(二項能動詞)「<u>犬</u> $\mathring{T}$  + <u>猫コト</u> + 追っかけてる」 自動詞主語 Svi = 他動詞主語 Svt # 他動詞目的語 Ovt →「対格型」格表示

- ②自動詞文(一項所動詞)「笛ガ+鳴ってる」
- ①他動詞文(二項所動詞)「犬ガニ+笛ガ+聞こえてる」

自動詞主語 Svi =他動詞目的語 Ovt ≠他動詞主語 Svt →「能格型」格表示



埼玉県東南部方言は、「②走る」「⑥追っかける」のような生物主語を取る「能動詞 active verb」のうちの、目的語をとる「二項能動詞⑥(=典型的他動詞)」文が対格型格表示を示し、共通語の「⑥鳴る」「⑥聞こえる」のような無生物主語を取る「所動詞 inactive verb」のうちの、「~に+~が+所動詞」文に対応する動詞文(「二項所動詞⑥」文)が能格型格表示を示している。すなわち、①「主語(動作主)+目的語(対象)+二項能動詞⑥(=典型的他動詞)」文では、目的語が格助詞「コト」で表示され、②「主語(経験者)+目的語(対象)+二項所動詞⑥(=非典型的他動詞)」文では、主語が格助詞「ガニ」で表示されるのである。

なお、「二項所動詞①(=非典型的他動詞)」には、所有の「有る」、必要の「要る」、可能の「分かる」「見える」「書ける・読める・話せるナド(他動詞から派生した可能動詞)」が含まれる。

従って、埼玉県東南部方言は、基本的には「対格型」言語であるが、周辺的に「能格型」の言語現象を示す、弱い意味の「分裂能格型」言語の例ということになる。「ガニ」のような特別な格形式を持たない東京語は典型的な「対格型」言語ということになる。

#### 本書「語彙篇」としての CD-ROM 版「埼玉県東南部方言語彙集」について

「埼玉県東南部方言語彙集」は、見出し語に音韻表記とアクセントを示し、 品詞・活用の種類など文法事項を明示し、意味の記述に当たっても言語学的、 文化誌的考察を加えて、今はもう消滅目前のかつて使われた方言語彙の実際を 少しでも正確に記録し残すものとすることを目指している。

以上いくつかかいつまんで紹介したように、本書は、埼玉県東南部地域の方言を、言語として記述し、言語学的にその音韻・文法・語彙の全体としての体系と構造を明らかにしようと試みたものである。

## まえがき

本書は、1972年(昭和47年)の修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』を原本とし、その補訂版である1996年(平成8年)の私家版『埼玉県東南部方言の記述的研究 付. 埼玉県東南部方言語彙集』を改訂したものである。基本的に1972年の原本の枠組みと内容・形式を維持している。しかし、その後の40年余の調査・研究で判明したことや言語事象に対する把え方・考え方の進展によって、変更・補訂の必要が生じた箇所については、「訂正」「補説」などとして必要な変更・補訂を加えた。文意明確化のために加えた加筆・修正等については特に断らない。

「1. 音韻(分節音素)」と「2. アクセント(かぶせ音素)」からなる音韻篇は、調査内容の性格上 1972 年当時のままとした。従って、その後の変容(共通語化)は追っていない。「3. 文法」の文法篇については、構文法や格助詞に関する調査と研究の深化に伴い、記述の形式と内容を改める必要を感じているが、書き改める場合の全体の構想と体系が十分にできていないため、関連箇所での注記(注記は内容上重複することがある)と、その後に書き継いだ論文二編を便宜的に「4. 構文法」として別立てして載せることにとどめた。

また続編の「語彙集」は、殆ど死語の俚言や民俗語彙だけでなく、基礎語彙や機能語もその音韻的特徴や文法的機能など目立つものについて気づいたものを記録し記述するように心がけた。

著者は、本書で「方言」を「言語」として記述している。基本的には、言語を構造・体系をなすものとして記述しようとしている。いわゆる国語学・方言学の伝統とは自由な立場から、構造言語学的に、言語としての方言の言語事象を明らかにしようとした。基本的に構造言語学の理論と方法論に基づいているが、文法の記述においては、構造言語学以後の、格文法・結合価理論・生成文法・言語類型論等の諸知見も参考にし、記述に有用な概念や術語は、必要に応じて用いている。なお、修士論文『埼玉県東南部方言の記述的研究』は、1970年(昭和45年)の学士論文『埼玉県草加市小山町方言の記述的研究』を受けて、研究範囲と内容を拡大したものであることも言い添えておきたい。

#### 調査地域

川口市東北部(旧戸塚村、旧安行村、旧新郷村)

草加市(旧草加町、旧谷塚村、旧新田村、旧安行村の一部)

八潮市(旧八条村、旧八幡村、旧潮止村)

その他、三郷市・吉川市・越谷市など

以上、埼玉県の北足立郡の南部および南埼玉郡の南部の地域

#### 調査方法およびインフォーマント

主として土地の人々の自然な会話を傍らで聞き取るという方法(自然傍受法)をとった。調査者ができるだけ自然な形で会話に加わることがあっても、基本的に話者は調査されているのを知らないで話している。上記の川口・草加・八潮地域の土地の人(不特定多数)に対して、ランダムにこれを行った。この方法には自然談話のもつ長所もあるが、調査によって知りうる項目がやはり部分的なものになること、掘り下げた質問や聞き取りができないことなどの欠点がある。これらの欠点を補い、調査の内容をより網羅的な掘り下げたものにするために、次の人たちに、音韻・文法・語彙の全般に亙る調査のインフォーマントになってもらった。特に発音とアクセントに関しては作成した調査表を読んでもらったり、口頭で質問して答えてもらったりなどして細かい調査を行った。

「姓名を略す。年齢などは 1972 年(昭和 47 年) 12 月のもの。]

- 明治 25 年(1892 年)生まれの女性: 81 歳。21 歳まで旧戸塚村下戸塚(川口市戸塚)に居住。以後、旧新郷村赤井(川口市赤井)に居住。既に故人。
- 明治 33 年(1900 年)生まれの男性:73 歳。旧安行村大字小山(草加市小山) に生まれ、引き続いて居住。既に故人。
- 明治 42 年(1909 年) 生まれの男性:64 歳。旧安行村大字原分(草加市小山) に2歳から引き続いて居住。既に故人。
- 大正 10 年(1921 年)生まれの女性: 52 歳。旧新郷村赤井生まれ。20 歳以後 旧安行村大字原分(草加市小山)に居住。既に故人。
- 昭和17年(1942年)生まれの男性:30歳。旧谷塚村瀬崎(草加市谷塚)に生まれ、引き続いて居住。
- 昭和17年(1942年)生まれの男性:30歳。旧安行村大字原分(草加市小山) に生まれ、引き続いて居住。
- 昭和21年(1946年)生まれの男性:26歳。旧安行村大字苗塚(草加市苗塚)

に生まれ、引き続いて居住。

自然傍受法と簡単な質問調査等で比較的多くの資料を得た人たち。[姓名を略す]。 上つきの。は生地に引き続いて居住していて移動のない者。

(全員 20 歳前後まではその土地に引き続いて居住していた人たちである。)

川口市安行	草加市小山
男性° 64 歳	女性 <sup>。</sup> 90 歳
男性° 25 歳	男性° 45 歳
男性° 25 歳	女性° 33 歳
女性 <sup>°</sup> 25 歳	女性° 24 歳
川口市後峰	女性° 6歳
女性 <sup>。</sup> 36 歳	女性° 5歳
川口市領家	草加市花栗
女性 67 歳	女性° 25 歳
川口市赤井	草加市氷川
女性。 40 歳	女性 46 歳
男性° 24 歳	草加市内
男性。 23 歳	男性。 25 歳
女性° 20 歳	女性。 25 歳
川口市新郷	女性。 20 歳
男性 84 歳	
八潮市大曽根	吉川市内
女性° 50 歳	男性 60 歳
男性° 50 歳	女性 <sup>。</sup> 14 歳
男性° 45 歳	
女性 43 歳	越谷市内
女性 <sup>°</sup> 25 歳	男性。 23 歳
女性 <sup>°</sup> 25 歳	
男性。 25 歳	
男性。 17 歳	東京都足立区舎人
女性° 14 歳	男性。 30 歳

参考:地名の発音とアクセント

川□ /ka'waŋu1ci/

安行 /'an lnjor ~ 'annjolr/

後峰 /'usiromilne/

戸塚 /tozulka/

領家 /rjorlke/

赤井/'akai~'aker/

新郷 /sin lnor/(もとは「本郷」/honnolr/と言った土地)

草加 /sorka/

小山 /ko'jama/(もとは「原分」/haralbun/と言った土地を含む)

苗塚 /na'izulka ~ nerzulka/

花栗 /hanaŋu1ri/

氷川 /hikal'wa/(もとは「南草加」/minamizorlka/と言った土地)

八潮 /'jasil'o/

八幡 /'ja'wata/

潮止/si'odome/

八條 /hacizio1r/

三郷 /misato/

吉川/'josikal'wa/

越谷 /kosiŋal'ja ~ kosiŋelr/

足立/'adaci~'adalci/

舎人 /toneri/

なお、市街地(「町、町方」/maci=1, macikata<sup>-</sup>/)は、共通語化が[とりわけ戦後世代で]進んでいて、郊外の地域(「在、在方」/zerl, zerkalta/)の言葉とは種々の点で異なるので、ここでは記述から除外している。

#### 調査の結果と記述の態度(1972年版のまま載せる)

調査結果は、①大体 40 歳代(1972 年当時)以上では地域差が殆どないこと、② 30 歳代(1972 年当時)以下の若い年齢の者がそれ以上の者と多くの異なり[年齢層差]を見せることが分かった。(若い層は若い層で互いに似ていてあまり違いがなかった。)

筆者は、高校時代に日常身辺の語彙を調べ始め、同じころ Daniel Jones の

An Outline of English Phonetics と服部四郎の『音聲學』に親しんで自身と周囲の発音を観察し始めてから、大学・大学院時代には言語学・国語学・方言学を学び、既に 10 年近く(2016 年現在では 50 年の余)学問的関心をもってこの方言を観察してきている。それと上記の調査結果、および native speaker としての自身の内省を加えつつ、地域言語体としての方言の言語としての体系を記述することを目ざした。従って、単なる調査の報告ではないことを了解していただきたいと思う。

なお、筆者は、埼玉県北足立郡旧安行村大字原分(草加市小山町)に 1947 年 (昭和 22 年)に生まれ、現在(1972 年)まで同地を離れたことがない。(1985 年 に越谷市に転居。)

#### 方言の境界

細かく見れば、内部でも、大宮台地安行支台の地域では「台地に切れ込んだ開析谷」を「やつ」/'jacu<sup>-</sup>/と言い、旧利根川(古利根川・元荒川・中川)筋の地域では「川沿いの泥の深い低湿な土地」を「やっから」/'jaQkara<sup>-</sup>/と言っているが、双方でそれぞれの語については知らないと言うのが普通である。こういう地域特有な語彙的な偏差はあるものの、今回の調査の範囲に含まれた上記の川口・草加・八潮地域内では、音韻・文法・基礎的語彙などに関して比較的よく似た言語が話されていて、その意味で境界は問題にならなかった。

この方言の境界は、例えば音韻に関しては、「非語頭位置のガ行音」は埼玉県東北部では有声破裂音で鼻音ではないこと、「母音間のカ行・タ行子音」が千葉県北部や茨城県では有声化することなど、もう少し範囲を広げて精査すれば明らかにできるかもしれないが、課題のままとなっている。

この方面の研究にあってはさしあたって次のものの分布を明らかにする必要がある。

- 1. /ŋV/(ガ行鼻音)の地理的分布
- 2. /'i/:/'e/、/hi/:/he/が音韻的に対立するかどうか。(高年層の言語で)
- 3. アクセント
- 4. 格助詞 /ηe/(与格)、/ηalni/(能力格※)、/kolto/(対格) の地理的分布
- 5. 動詞確否形(/kakolnka/[(絶対に)書かない]、/'akeronkal/[(絶対に)開けない]…)の分布
- 6. カ変動詞「来る」の受身・可能動詞「来される /kisarerul ~ kisa'irul/」 の分布

※/ŋalni/に関しては、その後の高年層の用法の精査から、意味格の「能力格」ではなく、構造格の「能格」と考えるようになった。格助詞「ガニ」の補説(271 頁以下)を参照。

#### 「2014年現在の方言の現状と本書との関係」

上記部分を、2014年現在において改めて把え返して述べ直すと以下のようである。埼玉県東南部方言の現状は大雑把に、

- ①戦前(1945年頃以前)に言語形成期を終えた世代、
- ②高度経済成長期以前(1970年頃以前)に言語形成期を終えた世代、
- ③高度成長期以後に言語形成期を終えた世代
- の三つの言語層に分かれている。
- ①は「イ/エ」「ヒ/へ」の音韻的区別がなく、方言に特有な格助詞「コト・ ガニ・ゲーが健在な世代である。
- ②は「1/x」「1/x」の音韻的区別が復活し、格助詞は「1/x」のみ健在で、個人差を伴って「1/x」の順に漸減し消失に至っている世代である。
- ③高度成長期以後の世代は、都市化が進行し新住民人口が圧倒的多数化した 結果、方言の世代間伝承が非常に希薄になり、共通語化が著しく進行し、音 韻・文法・語彙における旧来の方言的特徴が殆ど失われている。
- ①→②→③という言語変化は地域社会のあり方の変化と相関するもので、筆者生地周辺地域の変容は『草加市史研究・第11号』(1998 草加市)の「草加の道(4)—草加・安行地区—」36頁の表4「安行地区の戸数(世帯)の動態」によってよく窺うことができるので紹介しておく。著者の高橋操氏はこの表をもとに次のように述べている。

「…草加市域の安行地区[旧安行村を構成していた大字のうち、昭和三十二年(1957)五月一日に草加町に編入された、苗塚・花栗及び北谷・小山・原の各一部]は、台地上に立地する川口市域の安行地区に比べるとその歴史は新しい。…中世(十二世紀末から十六世紀ごろ)にはある程度の規模を有する集落が形成されていたものと推定することができる。…花栗を除く苗塚・小山・北谷などは、文政五年(1822)から百四十年後の昭和三十六年(1961)に至るまで、戸数(世帯数)はほとんど変化していなかったことがわかる。江戸時代の村域とほとんど変化がない苗塚町の平成八年(1996)十月一日現在の世帯数をみると九二六世帯あり、文政五年(1822)

時の十五戸の六十二倍に達している[昭和 36 年(1961)の戸数は 19 戸(引 用者注)]。これらの数値から見ても、江戸時代末期から昭和三十六年ごろ までは大きな変化もなく、昔の姿を残していたことがはっきりわかる。」

本研究は、埼玉県川口市東部と草加市およびその周辺域の第二次世界大戦以 前に言語形成期を終えた世代①と、高度経済成長期以前(1970年頃以前)に言 語形成期を終えた世代②を主たる対象としている。

なお、①の世代の言語の文法・意味に関する細部にわたる記述内容に関して は、明治42年(1909)生まれの北足立郡旧安行村(現草加市)在住の男性の個人 語 idiolect の継続的な調査(1970 ~ 2000 年)の結果に基づくところが大きい。 氏は文法事項に関して自身の内省内容をことばで説明できたのでその報告をふ まえて記述するように小がけた。殊に方言に特有な格助詞コト・ガニ・ゲの意 味と用法の「補足部分【】」の多くは、文法性や認容可能性の氏による判断と 内省をふまえて書かれている。

以上のように現在の時点では言い換えることができる。

# 目 次

埼玉県東南部方言の特徴と本書の概要 iii				
音韻に関して iii				
文法に関して v				
本書「語彙篇」としての CD-ROM 版「埼玉県東南部方言語彙集」				
ついて viii				
まえがき ix				
調査地域 x				
調査方法およびインフォーマントx				
調査の結果と記述の態度(1972 年のまま載せる) xii				
方言の境界 xiii				
「2014 年現在の方言の現状と本書との関係」 xiv				
1. 音韻				
1.1 音素の数とその種類 3				
1.2 音素体系 3				
1.3 シラベーム syllabeme の構造 4				
1.3.1 シラベームの種類 4				
1.3.2 音素の分布の制限 5				
1.4 モーラ mora 5				
1.5 モーラ表 6				
1.6 音素とその異音 7				
1.6.1 母音音素 /V <sub>1</sub> / 7				
$1.6.2$ 母音音素 $/V_2/=/R/$ 〈「引き音(引音)」〉 17				
1.6.3 呼気段落末尾の /V/ および /Vr/ について 17				
1.6.4 半母音音素 /S/ 18				
1.6.5 子音音素 /C <sub>1</sub> / 20				
1.6.6 子音音素 /C <sub>2</sub> / 30				
1.7 母音の無声化について 36				
1.8 鼻的破裂音 faucal plosive について 39				

	1.9 強調的な子音の gemination(音重複)について 39			
	1.10 音韻変化 40			
	1.10.1 完成的音韻変化 42			
	1.10.2 不完成的音韻変化 45			
	1.10.3 語彙的な変化 54			
_				
2.				
	2.1 アクセント体系 63			
	2.1.1 アクセントの相 63			
	2.1.2 アクセントの型 64			
	2.1.3 アクセント体系のまとめ 67			
	2.2 アクセント型とその所属語彙 70			
	2.2.1 体言類 71			
	2.2.1.1 準 2 モーラ語のアクセント 71			
	2.2.1.2 2 モーラ語のアクセント 72			
	2.2.1.3 3 モーラ語のアクセント 77			
	2.2.1.4 4モーラ語のアクセント 83			
	2.2.1.5 5 モーラ語のアクセント 85			
	2.2.1.6 6 モーラ語のアクセント 87			
	2.3 アクセント各説 88			
	2.3.1 動詞のアクセント 88			
	2.3.1.1 活用形のアクセント 89			
	2.3.1.2 動詞のアクセント型と所属語彙 94			
	2.3.2 形容詞のアクセント 98			
	2.3.2.1 形容詞のアクセント型と所属語彙 100			
	2.3.3 用言の類別語彙とその対応 103			
	2.3.4 付属語のアクセント 104			
	2.3.4.1 助詞のアクセント 104			
	2.3.4.2 助動詞のアクセント 110			
	2.3.4.3 連結に伴うアクセント変異 111			
3.	文法113			
	3.1 品詞分類 117			
	3.2 動詞 119			

4.

	3.2.1	動詞の形態(論)的特徴による種類分け 125
	3.2.2	活用形概説 143
	3.2.3	能動詞・所動詞 / 生物類名詞・無生物類名詞について 197
3.3	形容詞	词 204
	3.3.1	形容詞活用形概説 211
	3.3.2	情意形容詞・感覚形容詞・性状形容詞 219
3.4	状態	词 223
3.5	名詞	227
	3.5.1	狭義の「名詞」 230
	3.5.2	位置詞 232
	3.5.3	時数詞 233
	3.5.4	代名詞 233
3.6	副詞	・連体詞・接続詞・感動詞 239
3.7	助動	河 242
3.8	準体	功詞 253
	3.8.1	名詞的準体助詞 253
	3.8.2	状態詞的準体助詞 257
3.9	助詞	259
	3.9.1	格助詞 259
	3.9.2	副助詞 292
	3.9.3	接続助詞 296
	3.9.4	並立助詞 298
	3.9.5	終助詞 298
3.10	) 間投	助詞 301
構文法	去	
4.1	埼玉県	県東南部の方言(旧北足立郡安行村方言)の「統語的格助詞」の
	配置	305
	4.1.1	「基本構文」における統語的格助詞の配置 305
	4.	1.1.1 一項述語文における統語的格助詞の配置 305
	4.	1.1.2 二項述語文における統語的格助詞の配置 305
	4.	1.1.3 三項述語文における統語的格助詞の配置 309
	4.1.2	「関連派生構文」における統語的格助詞の配置 309

- 4.1.2.1 「使役文」における統語的格助詞の配置 310
- 4.1.2.2 「間接受動文」における統語的格助詞の配置 311
- 4.1.2.3 「直接受動文」における統語的格助詞の配置 311
- 4.1.2.4 「可能文」における統語的格助詞の配置 312
- 4.2 方言の基本的文型と格助詞 313
  - 4.2.1 二項述語文 313
    - 4.2.1.1 動作主主語をとる典型的な他動詞構文 313
    - 4.2.1.2 特異な「二重化された目的語」をとる他動詞構文 315
    - 4.2.1.3 動作主主語をとり、目的語に対格以外の格をとる他動詞 構文 316
    - 4.2.1.4 経験者主語をとる他動詞構文 318
    - 4.2.1.5 経験者主語をとり、目的語に対格以外の格をとる他動詞 構文 318
    - 4.2.1.6 経験者主語をとる所動詞(非対格動詞)構文 319
    - 4.2.1.7 経験者主語をとる情意形容詞構文 321
  - 4.2.2 三項述語文 323

あとがき 328

原田伊佐男氏の学問(久島 茂) 330

索 引 332

付録 CD-ROM[PDF ファイルにて収録]

- · 埼玉県東南部方言語彙集
- ・「付録」「琉球語の活用の成立に関する考察

──「居り」・「有り」の「終止形」をどうみるか──」

# 主な【補足・補説】項目等:

- p. 142 「基本語幹」と「実現語幹」(いわゆる「音便語幹」)について
- p. 168 「アスペクト」について―「終結形 /-cja'-u/」と「継続形 /-te-ru/」―
- p. 169 「E-1 終結形 /-cja'-u/」の終結相について
- p. 170 「E-3 継続形 /-te-ru/」の「継続相」について
- p. 183 他動詞派生接尾辞「- カス /-kas-u/」について
- p. 187 「二重使役の 2 タイプとその受動形」について
- p. 192 特異な「二重化された目的語」をとる他動詞の受身表現
- p. 198 「他動詞」と「二項所動詞」について
- p. 209 終止 = 連体形の末尾音 /V<sup>2</sup>R/ の /V<sup>2</sup>/ を語幹とする形容詞活用について
- p. 226 体言の「状態詞」と用言の「形容詞」について
- p. 228 「補語」について
- p. 231 居住地名・組織名の「集合名詞 | 的用法について
- p. 233 「人称代名詞」の「定称」の階層性と二重の二項対立について
- p. 254 名詞節を作る 2 つの /no/(「名詞化助詞 no<sup>1</sup>」と「代名助詞 no<sup>2</sup>」)について
- p. 261 「が」格で表示される共通語のいわゆる「対象語」に対応する表現について
- p. 265 対格コトの必要性について
- p. 269 格助詞「コト・ゲ・ニ」と複合動詞「+つく」と単純動詞について
- p. 271 能格ガニの必要性について
- p. 271 格助詞 /ŋa lni/ についての訂正と補足
- p. 277 「感覚形容詞文と性状形容詞文の特異なガニ」について
- p. 278 「ポニ名詞句」が主語であることについて
- p. 288 格助詞 /ηalni/ と /ηe/ および準体助詞 /ηalno/ の語源について
- p. 288 格助詞 /kolto/ の語源について
- p. 290 埼玉東南部方言における対格 /kolto/ と能格 /ŋalni/ の併存問題について